斎藤龍太郎

4句

（4頁）

（十行二十字）

慮にか彼の同情者、彼の渇仰者がみるとりふ
立派な證據となるのである。
たとひ、島田君が身も心も廢たれて、生き
なからの骸同然の有様となってしまったとし
ても、これを思へば、特に以て瞑すべしである。又、島田君にして心あらば、よし石に噛
りついてでもいゝから、再び起つの心掻げが
なくてはならぬ。
今「地上」が一部すら賣れないにしろ、かうい
ふ同情者があるとりふのは島田君の強味であ

斎藤龍太郎